
レジェンド・オブ・一般ピー・ポー

忘却の彼方

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

レジエンド・オブ・一般ピーポー

【Zコード】

Z5070T

【作者名】

忘却の彼方

【あらすじ】

一般人だったはずなのに何がなんだか分からぬ内に、鋼殻のレギオスの世界に逝つてしまつた男が、今度こそ長生きしてやると死に物狂いでフラグを折る本末転倒な物語です。

始めはレジエンド・オブ・レギオスから始まりますのでそちらのほうが少し独自解釈や設定捏造があつたりするかも知れません。ご容赦下さい。

超不定期更新に加えて鈍亀更新です。

初めての投稿で分からぬところがあるかも知れませんが頑張りたいと思います。

プロローグ（前書き）

プロローグです。

プロローグ

その時は突然訪れた。果たして何が悪かったのかは全然分からぬ。日頃の行いは悪くなかったはずだ。特別運が悪いわけでもない。とすれば偶然だつたのかもしない、あるいは運命だつたのかもしない。つまり何が言いたいのかと言うと通り魔に刺されました。こうグサツと左脇腹から抉り込むかのような角度で。不思議と痛みは無かつたし、むしろこれまで生きてきた16年間で最高の冷静さだと思った。だが体そうはいかなかつた。力が入らずその場にうずくまつてしまつ。ああ俺死ぬんだな……ふとそう感じた。その瞬間全てが現実味を帯びた。麻痺していいた痛みがやつて来る。酷い鈍痛だ。冷静だつた頭も死にたく無いという言葉で一杯になる。ナイフは抜いた方が良いかと思つたが、直ぐに刺さつたままの方が良いと考え直す。ポケットから携帯を取りだそうとするが上手く取れない。焦つて忙しなく手を動かし、ポケットをまさぐるがやつぱり上手く取れない。やつとのことで携帯を取り出すが意識が朦朧となる。携帯のボタンを押し救急車を呼ぼうとするが、そこで意識が途切れる。

次のニュースです。この前からの連續通り魔事件に新たな犠牲者です。A県K高の高校生が腹にナイフを刺されて死亡するという事件が7時頃に起きました。この高校生は最後の際に携帯を握りしめて

おり連絡しようとした所で息絶えたようです。現在、警察からの詳しい調査結果を待つ状況です。

第一話 転生？トリックパーティ何だらう。（前書き）

第一話です。まだ一日目ですが、投稿出来て良かつたです。読者が待っている……すいません。誰も待ってませんね。調子乗りました。本当はもっと長くしたいけど携帯からなのですいません。短いですが、もしよろしければ感想を下さると嬉しいです。

第一話 転生？トリップか何だらけ。

まるで水面から浮かび上がる、といづよつは引き上げられるかのような感覚がする。暗転していたかのように暗かった視界が色彩を帯び、明るくなる。未だぼんやりする頭で考える。（あれ……オレ死んだはずじゃ……）そこまで思考するがぼんやりとした頭では確りと思考出来ない。それでもしばらくすると、視界も安定し頭も冴えてくる。まずは、周りを見渡して見る。白いカーテン、白いタイトルになんかの薬であろう臭いが覚醒したばかりの脳に直撃する。普段なら少し不快感を催す臭いであるが、死にかけて助かった身としては、それさえも生きていることを実感出来る素晴らしい感覚だと思った。そして怪我の具合を確認しようと、体を起こしそうとしたらある違和感を感じた。何か動かし辛い。全体的にだ。例えるなら自分のイメージした動きと実際の動きが違うような感じ。それだけならまだ良かつた。もしかして自分としては一瞬だったが、長い間昏睡状態だったのかもしれないからだ。だがそんな感じの動かし辛さじやなかつた。ベットの掛け布団をどかしてみて、気付いた。何かちつちつ。ぶつちやけると尺が足りなかつた。もちろん絶叫を上げたオレは悪くないはず。誰だつて起きたら体が小さくなつてたら、何らかの奇行に走るはずだ。オレは叫ぶことを選んだだけだ。

——心此処に在らず。オレの現状を表すのにこれほど適した言葉は無いと思う。その後、絶叫したオレだったが、その声を聞いた看護士さんが見に来た。そしてあれよあれよと言つ間に検査の嵐。だがオレはそんなことに全く気にせず、何で体が縮んだのかを考えていた……が直ぐに理由が分かった。検査中に機械にうつすら映る自分の顔を見たら、なんと全く知らない顔の子供が居るではないか。右目を閉じて見る。奴も右目を閉じる。次に、唇の口角を上げてみる。奴がオレを小馬鹿にしたように口角を釣り上げる。…………こいつオレだ！？

そんなこんなでオレは体が縮んだのではなく、全く知らない誰かに憑依してしまったことに悟るのである。

第一話　これからの方針（前書き）

第一話です。お気に入りに入れて下さった方どうも有り難うござります。拙い文才で書いた小説ですが宜しくお願ひします。

ちなみに第一話を読む前に補足です。主人公は、鋼殻のレギオスといつかレジェンド・オブ・レギオスは知っています。ただまだ気付いて無いだけです。

面白いと感じたら、感想待つてます。

第一話 これからの方針

検査が終わったのはもうすっかり日が沈んだあとで、やっとベッドに戻つて来た。色々と分からぬことだらけで理解が追いつかないが、分かったことが一つある。まずは、オレの名前だ。どうやらこの体の持ち主はルクライン・ライトという名前らしい。医者がそう呼んでたし、病室の名札をみた限り間違いないだろう。あと、もう一つは何故か外から見える景色がオーロラだつたことだ。もしかすると北極に近いのかと思った。夜空いっぱいに広がる光のキャンパス。何だか自分がちっぽけな存在に思えてくる。そこまで考えて、あらためて病室を見てみる。（広いな……しかも個室だ）それにしても「暇だな」部屋の静寂に耐えられず、ついつぶやいてしまうが、そのつぶやきに反応する者は居らず空気に溶け込むように消え、静寂が戻つてくる。虚しい。それがオレの率直な気持ちだつた。「寝るか」明日また考えよ。

起きてまづ日に着いたのは、黒のスーツにサングラスをついた一見くたびれた感じのサラリーマン風のオッサンだつたが身に纏う雰囲気が何やら物々しい。「ようやく起きたか」やや低い渋目の声で話しかけてきた。「お前は私のファミリーを継ぐんだ。そんな体たらくでは困るな」こきなり変なことをのたまつた。内心の動揺を必死

に顔に出ないようにする。「ファミリー？」そう言つとビリやらオレと関係の深そうなオッサンは、少し訝しげな顔をして「私の息子なんだから、継ぐのは当たり前だろう?」……取り敢えずこのオッサンがオレの親だということが発覚。だが重要なところが分からない。ファミリーって何ですか。それとなく聞いてみる。「継がないと駄目ですか?」するとオッサンの方からとてつもない威圧がかかる。「……私の代でアトラスファミリーを潰す気かね?このフォーダノスシティで一番の勢力誇るマフィアを」何か凄く話しが飛躍して来た。マフィア?ファミリーってマフィアのことかよ!それよりフォーダノスシティ?どちらへんなの?「フォーダノスシティってどこらへんなの?」「……頭でも打つたか?後内周都市郡の端つこだ」後内周都市郡?訳分からん単語が出てきた。流石にこれを聞くのはまずいか……。「まあ良い。取り敢えず体を治せ。詳しいことは退院してからだ」沈黙になるのが嫌なのか、単に時間を惜しんだのか知らないが少し早口で言つと足早に去つて行く。オレはただ去つていく背中を見えなくなるまで凝視していた。

第三話 第一回死亡フラグ（前書き）

三話です。やつと主人公がレジェンド・オブ・レギオスの世界に気付きました。行き当たりばつたりで書いている僕ですがクオリティだけは落としたく無いので（落ちるほどのクオリティは無いんですが）毎日更新では無くなるかも知れませんがどんな形であれ完結はしたいと思います。

面白いと感じたら感想を宜しくお願いします。

第三話 第一回死亡フラグ

色々言いたいことがある。取り敢えずマフィアの息子なのは分かつたし百歩譲つて許そう。だが折角拾つた命だ。今度こそは長く生きたい。これは切実な願いだ。都合良くもう一度こんな現象が起ころわけが無い。ならばここで生きていくしかない。今度こそ絶対に寿命まで生き延びてやる！……と決意したのは良いんだが、マフィアの息子？死亡フラグ満載……早く何とかしなければ。また早く死んでしまう。これが取り敢えず色々の内の一つだ。

もう一つは、何で昼なのにオーロラでてるの？誰も疑問に思つてないから聞けないで居たんだが……ここでオレの脳……厳密には違うが、ピンチ！と来た。空がオーロラにマフィア、この都市の位置を聞いた時に出てきた単語、微妙に進んだ医療。このキーワードから、ここはレジェンド・オブ・レギオスの世界だつて。まあ違つたとしても非常に似てゐる世界といえるだろう。取り敢えずこれからやることが決つた。しばらくは、この世界が本当にレジェンド・オブ・レギオスの世界なのか調べよう。

夏も終わり、ころに差しかかつて少し冷え込むようになつた朝。自分がこの世界に来てから一ヶ月が経つ。自分がこの世界に来たころはうだるような暑さだったのが嘘みたいだ。やつとこの体にも慣れてきた。順調にマフィアのボスへの道をたどっています……あれオカシイな？ そんなフラグは建ててないはずだが？ 元々建つてたなんて決して認めない。

色々調べたがどうやらジョンド・オブ・レギオスの世界で概ね間違いないようだ。サー・キットなんかの存在も居るらしいし、亜空間増設機も在るらしい。ここまで揃えば決まりだらう。さてさらに大変なことが分かつた。そう遠く無い場所にガメルダ市が在るらしい。つまりだ。いつのかは知らんが。そう遠くない内にここら一帯はイグナシスの実験のせいでゼロ領域になる。マフィアの息子なんかよりも確定的で巨大な死亡フラグがオレには建設されていた。願わくば手抜き工事であることを願う。対策を考えて良い案がないか探したが……あれ？ 回避方法無くね？ 隣の亜空間に行きたいエ……さて回避が出来ないなら解体してしまえという事で、元凶のイグナシス君をどうにかすれば問題無いじゃないかと思つたが、更にムリゲー。……人間諦めが大事なのさ。オレが生きている間には来ませんようにと祈るだけしか出来ない。神様オレ何か悪いことしましたか。この鬼畜ムリゲーはクリア出来そうにありません神様。

第四話 マフィア（前書き）

第四話です。オッサン一回田の登場です。話しが飛躍し過ぎとか突つ込まれないと有難いです。

面白ないと感じたら感想待つてます。

第四話 マフィア

「の前は、自分が長生きすることの難しさに全オレが泣いた。だがまだ死ぬと決まったわけではない。取り敢えずはマフィアの方からかたづけようと思つ。まずは状況整理だ。家のファミリーはこの都市で一番の勢力を誇るらしい。これは親父から聞いたことだから間違いないだろ。家もでかいし。未だに迷う。どうにかして欲しい。地図が欲しいな。

- 閑話休題 -

対抗勢力は一つだけらしいし家ほど力を持つて無い。精々半分位らしい。一つ相手なら未だしもある一つは仲が悪いらしい。勢力図に家がこの一つの間にあるから抗争が無いとか。……あれなんかフレグを建てたような気がするよ? 気のせいだとオモイタイヨ。

とにかくオレはマフィアのボスの息子。安全に暮らすには、寧ろこのままボスになつた方が安全なのではと思つ。市民に紛れようにも、対抗勢力からちよつかいがくるかもしね。絶対とは言えんがより安全な道を歩みたい。ならば対抗することも出来ない位、家が大きくなれば良いんだ。といつ結論になつた。別に相手を陥れても良い

が、長生きするためなら何だってしてやるつー取り敢えずフアミコーを継ぐことを親父に言おう。

親父の書斎のドアの前に居る。親父の書斎の位置は一階の奥にある。何でも襲撃を受けたとき一番逃げやすい位置に在るらしい。オレは知らないが、噂では隠し通路があるらしい。無駄に豪華な飾り付けや重厚なドアが、かなりの威圧感を放っている。開けるだけでも気後れしそうだ。もしそれを狙っているなら決して無駄ではないような気がしてくる。してくるだけだ。僅かに冷や汗をかき、緊張した面持ちでドアをノックしようとすると、「開いている。何か用なら入つて来い」いきなりかけられた言葉にビクッとする。数秒間固まり「何だ? なにもないのか?」ともう一度かけられると慌ててドアノブを回し、ドアを開ける。そして、「失礼します」と一言かけ部屋に入る。

まず部屋に入つて見たのは真剣な表情で何か書類を処理している親父だった。目線は書類に通したまま親父は声をかける。「少し待つてくれ。直ぐ一段落つく」紙に文字を書く音だけが書斎に響く。非常に沈黙が痛い。ペンの音が少しして止む。「さて、何の用かな?」にこやかに聞いてくる。だが目が笑つて無い。ビビりつつもやつと声を喉から絞り出す。「オレ、このファミリーを継ぎたい」部屋の

温度が下がった。「別に、お前は俺の息子だ。黙つてもやるぞ？」とそこまで言つてからこりつ続ける。「それともそれは、今すぐに継ぎたいという事かな？私と敵対すると？」一瞬何を言われたのか理解出来ない。いや、しようとしなかつたが何やら勘違いされてるようで、話しが悪い方に行きそうで、慌てて反論しようとするがパクパク口が動くだけで肝心の声が出ない。焦つていると親父が急に真剣な表情を崩し「クツクツクツ」と笑つてくる。「冗談だ。本気にするなよ」と言い。椅子から立ち、こちらへ来て頭に手を置き腰を落として目線を合わせ、「取り敢えず、これぐらいで動搖している間はまだボスの座は渡せんな」「ボスになりたいなら勉強してこい。話しあそからだ」そういうと書類の処理に戻つて行く。オレはすっかり抜けた腰を引き摺り自室に戻る。

部屋に戻り、ベットに直行する。そして呟く「やべえ……あれがフアミリーを背負うボスの風格か……」「何かカツコー……決めた！オレ絶対フアミリーを継いでやるー！」

第五話 急展開つて程じゃない（前書き）

タイトル通り急展開つて言つても、あんまり変わつてませんが、時
間だけは流れました。レジエンドの方はハードカバーとラノベ版が
ありましたね。自分はハードカバーから買つたのでアイレインの顔
がラノベで出たときは渋いと思いました。ラノベ版でよく見ると
結構サヤとニールフィリアが違く見えるのは自分だけですかね？

面白いと感じたら感想を待つてます。最後にこんな趣味小説読んで
下さった方に感謝を。

第五話 急展開つて程じゃない

マフィアのボスになるって決めたけど……何か変わる訳でも無い。ただ黙つても繼げたものがより確定的になつただけだ。田頃からちゃんと勉強はしてゐるし、組織運営についてや、色々な知識何かを学んだ。その中に銃のこともあつた。初めて銃を触つて、撃ちたくなつて親父に言つたら的を用意してくれた。嬉々として的に向けて撃つたら……ええ、肩が脱臼しましたとも。あんなに反動があつたなんて映画に騙された……。ちなみに今では、ちゃんと撃てますよ？まあいまだに目標から15メルトル離れたらもう擦りもしないんですけどね。……自分で言つて悲しい。まあそれは置いといてだ。あの決断からもう四年経つた。季節で多少寒くなつたり暑くなつたりするんだが……空のオーロラのせいで真夏以外は何か寒く感じる。未だにオーロラには慣れないが初めのころのような感動は無くなつた。そろそろ前の世界位の体格になつて來た。前世に比べるとまだちつこいが、ちゃんと鍛えたおかげで前世の身体能力を遥かに上回つたが強化兵の皆さんと比べると月とすっぽん。他のファミリーと会談なんかも経験した。あの決断からかなりの成長を遂げたと言えると思う。まあここまで語つて何が言いたいんだとオレ念願のファミリーを継ぐことになりました。親父が言うには、あと数年したら試練を出すからそれさえクリアすれば継げるらしい。何でもそこまで決意が固いなら何か形に残る成果を上げてボスになれ……とそういうことらしい。そんなに考えててくれたのは、嬉しつつちゃんと嬉しいんだが、最近失敗したらどうしようとか考えてしまうようになつてしまつた。一度こういう思考に陥ると脱け出しにくい。さて、オレもこの四年遊んでた訳ではない。フラグ回避のための案を練つていた。一番確実なのは主人公のアイレインを発見することだが、それは無理。主人公の都市は外周都市の田舎の方だつたはずだから確認する術は無い。無理を越えて荒唐無稽。ならば、と浮かび上がつ

て来た案がこれまた現実的な案だつた。家の都市の近くにガルメダ
がある。つまり、原作キャラのリリスとニリスがいるならばレッド
ゾーンだということだ。オレのボスになつての初仕事はどうやら、
ガルメダ市のティルティスというマフィアの家族構成の調査からら
しい。他都市のマフィアにどうやって接触しよう。非常に先が思い
やられる。死亡フラグ折るために死亡フラグ建てるなんて、すつご
く矛盾といふか本末転倒な話だな。まあそんぐりいじやなきや生き
残れ

無い位厳しい世界だ。只でさえこの世界は鋼殻のレギオスの世界誕
生秘話。つまり前日譚である。ジャンルはラノベではなくハードカ
バーである。鋼殻のレギオスの原作者様はこの前日譚をバイオレン
スでハードがボイルドな物語と称している。つまり現実は厳しいつ
てことだ。今度こそは絶対長生きしてやるわ。

第六話 試練1（前書き）

第六話です。漸く主人公がボスになるときがやつて来ました。あと一話位試練の話が続きます。そしたら、晴れて主人公はボスになります。まだまだ必ずしもそうなるとは決まってないですがね。

あと自分の「ミー」オつてカツコいこと思つたんですけど皆さんはどうでしょ？彼の死に際はイカシます。

面白いと感じたら感想を待つてます。あと評価も。最後にこの駄目小説を読んで下さつて有り難うござります。暇潰しにでもなれば幸いです。

第六話 試練1

更に二年が経つた。取り敢えずは前世より長生き出来て良かった。第一関門突破だ。だがまだまだフラグは一杯だ。体格もがつしりして身長もギリギリ180ある位で前世よりも高くなつて嬉しい。目付きは悪いらしいが気にしない。……サングラスかけようかな？

その時が来たのは朝の訓練を終えて、ベタつく汗を流してさっぱりして朝食に向かい親父の向かい側に座ったときだ。いつもこれでもかという位の威圧感を発している親父の雰囲気が威圧感というよりかは、ピリピリしているようだった。空気に重さなどないというのに空気が重く感じる。親父の雰囲気に少し気圧されてしまったオレは、食事に手をつけること無く沈黙する。目線だけを親父の方に向けて、その雰囲気の真意を悟ろうと頑張つてみるが読心術など出来

ないので諦めて親父が沈黙を破るのを待つ。 - - 数分経つただろうか？もしかしたらまだ一分も経つて無いかも知れない。やけに永く時間を感じる。やつと沈黙を破る気になつたようなのか、渋い髪を生やした口を開く。

「お前のボスを継ぐための試練が決まった」

唐突に来た。いつか来るだろうと身構えて居たが、実際に来るとあつけないものである。そして親父が続ける。

「試練の内容は、最近この都市に集団で流れついたマフィアの一団が勢力拡大のための資金集めとして薬をさばいてるらしい。そいつらの肃正だ」

……元一般市民になにさせんねん。ハードモードやないかいっ！盛大に心の中で叫ぶ。一応訓練の賜物か表情は崩さないようには出来た。つもりだがあとで聞いた話だと唇のはしがひきつってたらしい。

親父の話だと「マフィア」と書いたが、実際には、ギャングとか、チンピラの

あの後、詳しい概要を聞いた後、素晴らしい重い空気の中全く味が感じられない食事して部屋に戻った。

集まりと大して変わらないらしい。前の都市で勢力争いに負け、その際にボスと主だった幹部をやられたマフィアの残党だという話。せいぜい二十人前後で強化兵は無し。まあ強化兵が居ない時点で更に珍しい異民や異界侵蝕者は居ないだろう。……あれもしかしてまたオレ、フラグ建てた？

閑話休題

奴らのアジトは都市の外れにある開発済みの廃棄区画の工場跡らしい。なんとまあテンプレと言えるような所に陣取つたものだと言いたい。まあ現実何だから、奇想天外なことよりセオリーパーリー通りが何かと都合が良いし、効率的なのだろう。武装は都市から出てきたときのままで、あまり良い装備じやないそうだ。だが一部最近薬をさばいた金で、武器商人から武器を買つたらしい。要注意。とまあ情報はこんなところらしい。あとは行動パターンなどがあつたが細かいのを割愛する。親父は、部下はいくらでも使って良いと言つたが……マフィアだけならず全てのことと、少ない対価で最大の成果をあげることが世の中を上手く渡つていく秘訣だそうだ。親父が口癖のように言つていることだ。無駄が嫌いな親父にならうとしよう。取り敢えずは作戦会議だ。何人連れて行くのかや武装はどうするなど、いつ襲撃するとか決めないと。大変だな。だがこれも長生きするための第一歩。ギャング達にはオレの長生きのための礎となつてもらおうか。

第七話 試練2（前書き）

執筆中に間違えて一回消してしまいました。結構精神的に来ますね。

遅ながら、第七話です。主人公の試練が終わりました。そろそろレジョンの方の原作に向かって行きます。

面白いと感じたら感想を宜しくお願いします。評価も待っています。
最後にこんな駄目小説を読んで下さった方に感謝を。

第七話 試練2

作戦が決まった。この前は何か偉そうなこと言つてたが、確実に勝ててかつ無駄なくやれる人数も作戦も分からない。ここいら辺は経験しかない。とにかくこれがボスへの第一歩として、幸先良くスタートしたい。

作戦はこうだ。まず奴らは調べた情報によると明日の昼に薬の売買をするために数人が出かけるらしい。そこで手薄になつた廃虚を奇襲して制圧し、帰ってきた数人を始末する。そういうシナリオだ。作戦決行は明日。確り睡眠をとるか。

正午。今、作戦目標から一キロメル離れた所で待機している。斥候

部隊からの報告があがり次第突入する。実は居ました何て笑い事では済まないからな。何て考えて居るとガタイの良い精悍な顔立ちの男が近づいてくる。

「若、斥候からの報告です。どうやら情報は正しいと見てよろしいかと思われます」

「そうか、報告」¹⁾苦労

いやとなると緊張してくるな。前世は責任ある立場なんてあんまり経験してないしな。それがいきなり部下の命を預かる身だからな。胃に穴が空かないか心配だ。帰つたら胃薬でも買うか。いやでも再生手術すればいいかな？まあ予防という事で買つとくか。

「作戦決行」それが合図だつた。たつた一言それだけで何人もの人生が幕を閉じる。平和な日本で育つた一般人の自分としては、例え直接的でなくとも人の命を奪うことへの嫌悪感が凄まじい。だが一度死んでオレは決めた。今度こそ長生きしてやると……。そのためなら何を犠牲にしてもやり遂げると。

硝煙と血が混じる臭いがする。別に初めてではない。此方に来てから何回か嗅いだことのある臭いだ。だがやつぱり慣れない。そこらへんに打ち捨てられた死体が見える。必死に生きようと激しく抵抗したと一目で分かる。両足の甲が撃ち抜かれている。地面でも這つたのか、血痕が地面を擦つたように着いている。その後に心臓と頭を撃ち抜かれている。はつきり言つてグロい。気分転換の為に一度外に出ようとする。護衛の一人に一人になりたいと言つ。もちろん反対されたが押しきつた。しばらく歩くとやけに工場にしては飾り付けられたドアがあつた。何故ドアを開けたのか自分でも分からない。ただ分かつてるのは何故か開けなければいけないと思つたことだけだ。ドアを開けた先にはくたびれたスーツを着た男が椅子に座つて居る。オレはその男を知つていた。事前の資料で見た顔だ。資料に映つていた写真には野望に満ち溢れた目をしていたが、今は全く覇気が無い。男は入つて来たオレを一瞥してこう言つた。

「お客様かね？」

それを聞いたオレはこう答える。

「ああ、鉛玉のライスを届けにな」

男が盛大に笑う。数瞬遅れてオレも笑う。部屋の中は一人だけの笑い声が響く。

「なかなか面白いジョークじゃないか？フツ良いだろ？殺しな」

「どうせもう終りだ。新天地に賭けてみたがやはり無理だったようだ……」

男の独白を聞く。その言葉を一つともう何も言つ事は無いのか眼を瞑る。

「あんただつて死にたく無かつただろう。誰だつて死にたく無い。もちろんオレだつて死にたく無い」

「許して貰つ氣は無い。ただオレが生きる為にあんたが邪魔だつたという話だ」

「オレはあんたを殺した罪を背負つて生きていける程器用じゃないが……あんたという死にたく無かつた、必死に生きた人物が居たことは忘れない」

銃を構えて、引き金を引いた。距離は十メルトル以内、流石にこの距離で外すわけが無い。狙い通り額に着弾する。男は椅子から崩れ落ちる様に倒れた。

第八話 後始末（前書き）

お待たせしました。第八話です。やっと主人公がボスになるためのフラグを回収しました。

自分が原作の鋼殻のレギオスで好きなキャラはリンテンスです。あの人、良い味出しますよね？設定からして好きです。皆さんは誰なんでしょう？

面白いと感じたら感想を宜しくお願いします。評価も待っています。
最後にこんな駄目小説を読んで下さった方に感謝を。

あの後、護衛達が銃声を聞いて慌ててやつて来るのが良く分かつた。何故なら盛大に足音を鳴らして来たからである。訓練している筈なのに情けないと思う。余談だが家の訓練は軍隊式だ。ティルティスと一緒にである。話を戻すとして、もし撃たれたのがオレで相手が生き残っていたのならどうするつもりなのだろうか？格好の的である。まあ自分達のボスが撃たれたかも知れないから慌てるのも分からないわけでは無いけどな。ていうかボスはオレなんだが。まあ勢い良く部屋にダイナミックに突入してきた訳だ部下達が。ドアを蹴破る様に開けて、その勢いのままグルッと前転しながら一回転し体勢を素早く立て直し、銃の照準を確り此方に向けている。そんなに素晴らしい動きができるなら、足音とかの初步的なことを気にしてくれと声を大にして言いたい。その後、原状を説明して事なきを得たが、護衛共に怒られた。

何だかんだあつたが、流石勢力が一番のマフィアと額ける位には優秀だつたようだ。帰ってきた残党も一人残らず処理した。予定外なことも少しあつたが、概ね作戦通りに出来たようだ。今は後始末をしている所だ。原作で主人公のアイレインがしていたように薬品を使って骨まで残さず溶かす方法もあつたが、流石に大人数なので普

通に解体工場に持つて行つて溶鉱炉に棄てれば問題無いだろ。別に作業記録が残つても握り潰せるしな。さて、やつと腐臭から解放される。こんな陰気臭い工場なんてさつわとおわらばしたいな。そつ思いながらスイッチを押した。

帰つてきて直ぐに親父に報告する。すでに情報が回つていると思うが、何でも一つの視点ではなくあらゆる角度から見る方が良いだろ。鵜呑みにして間違つてしまたじや駄目だからな。特にこの業界では情報が命だ。情報屋とのパイプは太く持つべきだと教わつた。なんて考えて居ると書斎のドアの前に着いた。ドアをノックする。立て続けに四回叩く。因みに一回叩くのはトイレや空き部屋確認で、三回は友人や知人のときで、四回は初めて訪れる場所か礼儀の必要な相手に対する回数らしい。相も変わらず渋い声で返事がくる。ドアノブを掴み捻る。ドアを開けて中に入る。パリッとしたスースをダンディーに着こなす我が親父。ドアを閉めて机の前に近づく。

「親父、試練は達成してきたぞ」

開口一番に言つ。親父は眉一つ微動だにせず言い放つ。

「……詳しい報告をあげろ」

「少し位、頑張つて来た息子に労いの言葉とか無いのかよ?」

少しムツとしながら言い返す。

「ふむ……そうだな。まだまだ甘い所が有るようだがまあ及第点つて所か。これからはお前がボスなのだ。部下の命を一身に受ける。その重圧に負けないように精進しろ……位だな」

「さあ、報告してもらおうか」

褒めたのかどうか知らないような言い方だったが、話の流れからして褒めたんだろうな。さつさと報告終わらせるか。

報告が終わる。親父が話が終わつて少し間を取つてから話す。

「ボス交代には面倒くさい手順がある。まだ時間がかかるから、取り敢えず今日は部屋で休むと良いだろ?」

オレは素直に従う。表面上は大丈夫そうでも精神的には結構キテいたからな。ゆっくり休むか。そう思いながら書斎を出て自分の部屋に戻つて行つた。

第九話 マフィアのボス（前書き）

第九話です。やっとボスになりました。これからレジェンンドの世界を生き残るためにより一層頑張ってくれることでしょう。因みにこの小説主人公の名前全然でないから忘れた方も多いのでは無いのでしょうか？主人公の名前は……あれ何だつ（ｒｙ 名前は、ルクライン・ライトですよ！

面白いと感じたら感想を宜しくお願ひします。評価も待っています。
最後にこんな駄作を読んで下さった方に感謝を。

第九話 マフィアのボス

色々と、ボスの継承に必要なことがあった。継承式の打ち合わせや衣装のスーツの新調など色々あつた。まあ今は、段取りを終え小休止だ。継承式は明後日。この継承式に敵対マフィアである両ボスを招くという無謀なことをしても大丈夫なあたりに、あらためてアトラスファミリーの権力の強さが伺える。もし、継承式で襲われても守りきれる自信があると言うことだ。まあ別に言って無いだけでありの安全確保はあると言うことだ。避難経路を確り確保したり、当日の両ファミリーの監視、牽制もしている。そんなことする位なら招かなければ良いと思つたが、親父に理由を聞いて納得した。理由を聞いてみると、どうやら「家は、敵対関係の貴方方を招いても何ら問題無いですよ」と言いたいらしいのだ。言うならば一種の「デモンストレーションだ。家のファミリーが如何に力を持つて居るのかを両ボスに知らしめているわけだ。式場も盛大に飾り付けたり、格式ばつたもので統一して家の財力を見せ付けている。いつか親父の書斎のドアでオレが感じたようなものだ。まあ勢力図を維持するのも大変なわけだ。

とうとう、当日になつた。オレは、ぴったりのスーツを着こなし髪も整髪料でぴちっとオールバックに決めて見た、何か妙に似合うの

だが目付きの悪さから使用人と部下に声を掛けようとするとき大半が後退りやがつた。誰かオレに安らぎをくれ。オレにはやはり胃薬が必要だな。継承式が終わつたらマッハで買いに行こう。

継承式が始まる。周りを見渡すとこの都市で主だった者は皆来ているようだつた。そんな大人數を入れてもなお広いこの部屋を誓めるべきか、それとも呆れるべきなのか非常に迷つが……まあどうでもいいことだ。司会役の男がマイクを持って出てくる。ビックやり始まるようだ。静謐とした空氣の中、司会役の男の声が響く。

「これより、アトラスファミリーのボス継承の儀を始める」

「まずはボスの挨拶から」

司会役の男は、さう言つと舞台袖に移動する。代わりに親父が真ん中にやつて来る。

「えー本日はお忙しい中お集まり下さつた来賓の方々に感謝を

よくも親父はあんなに由々しく言えるもんだ。実際、拒否権は無いに等しいといつて。なんて思つてゐる内に親父の挨拶が終わりに差しかかつてくる。

「本日せむりくつ式」との後の立食会で楽しんでいたトモ

親父がお辞儀する。そして席に帰つてくる。

「次ぎはお前が話す番だ。良いか？最初が肝心だ。奮められなによ
うにな」

はつきり言つて皆の前でなに言つたのか覚えてない。なんかそれら
しきことを言つていたのは覚えているが、緊張か何かで考えててい
た話す内容が全部吹つ飛んだ。必死に思いだそうとするが、断片的
な単語位しかなくて、ほぼアドリブで頑張つた。誰かオレを褒め
てくれ。とにかく何事も無く継承式は終わつた。オレは念願のボス
になれたのだ。なつてしまつと案外呆気ないが、まだ感慨は湧かな
いだけで後から実感するだらつ。因みに今は、立食会だ。立食で食
べるときは主に交流を図るためにするが、やれ飲み物を注ごうだの、
食事を取ろうだのこつまで付きまとわれるのは、流石に鬱陶しい。
もちろん顔には出さないが。やつてる本人は気に入られるかどうか
で将来がどうなるかの瀬戸際だから、至つて眞面目にやつてるのは
分かるのだが察して欲しい。お前らが鬱陶しいことを。

あの後、オレは少し酔つたふりしてベランダに逃げ込んだ。別に嘘は言ってない。酔つたふりとはいえ、結構飲んだから夜風に当たりたかった。ベランダは風がとても涼かつた。溢れる蛍光灯の明かりやビルの明かり。高速道路を流れる車のライト。更に、空にはすっかり馴染んでしまったオーロラの空。素晴らしい夜景だつた。これ全てが人間の作つてものだと思うと何だか感慨深い。そうだなそろそろオーロラにも飽きてきた。いつか首都に行つて星空を見に行こう。天体観測と洒落こもつかな？

第十話 新展開（前書き）

第十話です。PVの方ですが一万超えました。ニーークの方は2500位です。とても嬉しいです。こんな小説を読んで下さって有り難いです。

因みに作中ででっかい死亡フラグが亡くなりますが、ちゃんと原作に繋がつて行くので心配しないで下さーい。

テンプレと化して来たこのセリフ。

面白いと感じたら感想を宜しくお願いします。評価も待ってます。こんな駄目小説ですが読んで下さった方に感謝を。

いつか首都に星空を見に行こうと決意したあの日から五年が経つた。人が変わるには十分な年月で、逆に何も変わらないにしては少し長い年月だ。もうすでにボスとしての仕事は日常の中の一部に過ぎない。朝起きて朝食を取り、書斎で書類を処理し、体が鈍らない為に昼から訓練して、また夜に書類を処理する。そして、寝るまでの時間に読書したりするとか、たまにパーティーや出入りがある程度だ。ルーチンワーク。現実は厳しい。マフィアの世界は良くも悪くも弱肉強食。自分が強の立場ならこれ以上に無い程やり易い。逆なのはごめんだと考えるのは人間のエゴ。実際問題誰かが強ならば誰かが弱に当てはまる。例えるなら勝者がいるなら敗者がいるそういう事だ。ボスになつてから五年色々経験した。今では勢力図が少し変わつた。相変わらず家のファミリーが一番だが二つ内の一つが最近凄まじい勢いで勢力を拡大している。幸い家のシマではなく、もう一つの所と大きいとは言えないが中堅に当たる家にもその二つに属して無かつたマフィア吸収しているらしい。それにより急激な勢力拡大を遂げたらしい。オレはこれの原因を最近になつて少しずつ見てきた異界侵食者のせいでは無いかと睨んでいる。原作でも異民化問題はあつたしなそれに異民となつて調子に乗つたファミリーがあつたし、それに近いケースなのだろう。異民化問題か……残念ながら今のオレにはどうすることも出来んな。アルケミストでも居ない限り。だがアルケミストは公式には全員死亡したと発表されたからな。厳密には死んで無いのも居るが何処にいるのか皆目検討がつかん。都市で一番権力があつてもどうすることも出来んとは情けない。

因みに話がガラツと替わるがガメルダ市の調査が済んだ。ティルティスというマフィアにリリスという娘が居ないか調べたんだが……嬉しい誤算があつた。何故なら調べた結果、リリスどころかティルティスというマフィアも居ないというのだから。この事を知ったときは内心駆け出したい位だつた。とにかく自分が生きている間は何とかなりそうだ。ならば問題は異民化の方だけだ。さて、本当に最近の勢力拡大は異民化のせいなのか詳しく調べますか。うーん、やることがいっぱいだ。これは、心の友の胃薬君と信頼を深めとくとするかな？

第十一話 転機（前書き）

第十一話です。遅くてすいません。

そろそろマフィア篇クライマックスです。レジェンドの原作に繋がって行きます。クライマックスって言つても自分の文才で上手く盛り上げれるか心配です。どうか生暖かい目で見て下さい。

面白いと感じたら感想をお願いします。評価も待っています。最後にこんな駄目小説を読んで下さった方に感謝を。

第十一話 転機

最近、勢力を増やしてきた片方のファミリーが遂にもう一方のファミリーをのみ込んだ。非常にまずい事態になつた。もともと家と同じ位のマフィアが後継者争いで一つに別れたから家が一番になつたのであって、そういう背景があつたからそもそも一つのファミリーが連盟を組む筈が無いとかを括つていて、これからも手を取り合はないだろうと考えていたのだが、吸收されたのなら話は別だ。一方が片方を隸属させているならば関係ない。更に、件の後継者争いがあつたのはもう一五〇年位前、幹部なら兎も角、下の方はもう既にそんなことあつたんだレベルだ。純粹に戦力を増やすなら下つぱを集めた方が手っ取り早いし、言う通りにならない幹部は寧ろ邪魔だ。実際に大部分の幹部は処分されたようだ。

さて、何でこんなになるまで対策をしていないかと言うと奴らの動きがオレ達の予想を遥かに越えて早かつたからだ。前に異民化問題を取り上げてからまだ一週間だ。この一週間は都市の勢力が著しく変わつた一週間だつた。都市史上に無いくらい激動の一週間だつた。異民化問題つてのを甘く見ていたのだろう。目に見えての侵攻は無いがオレ達のファミリーのテリトリーに平氣で入つてくることから既にオレ達のファミリーを恐れて無いのだろう。最低でも抵抗は出来ると言えているに違いない。情報屋からの情報で奴らが異民化してることは掴んだが……それだけだ。裏はとつて無いし断片的で判断がつかないが確実に異民化しているのだろう。でなきやこの強気な姿勢は無理だ。問題は異民化はどのようにしているのかだ。誰が手引きしているならそいつを始末すれば良いんだが……もし亜空間に綻びが出来たなら不味い。何とかしようがない。アルケミストは居ないし、亜空間増設機をいじれるような科学者は居ないし。どうか前者であることを願いたい。

あれから2週間、侵攻が始まつた。オレ達は自衛しているだけで手出しはしていない。情報待ちである。黒幕がいるのか、亜空間に穴が空いたのか調べている。攻撃が激しい。部下達から明らかに人間としてはあり得ない形をしていた奴がいると報告が来ている。異民化は確実のようだ。銃が効かないような奴もいたらしい。まだ数では勝っているが、異民化のせいで余り差はない。次第にこちらの数も減つて行くだろう。そうなつたら家の負けだ。あと3日待つて何の情報も入らなければ総力戦を仕掛ける積もりだ。持久戦になつても困るのはどちらかと言えば家の方だからな。

3日経つたが……入つて来た情報は奴らが異民化の力にあかせた局所的なゲリラ戦を始めて家に甚大な被害が出始めたというバッドニュースしか入らなかつた。……仕方ない。

今、オレは屋敷に居る全ての部下の前に立っている。流石、厳しい訓練を積んでいると思う整列だった。これから「イツらを死地に送らなければならない」と思つと責任で胃が潰れそうだった。だが迷つている暇はない。ボスが不^セうにしていると部下が心配する。内心の不安はあくびにも出さない。

「諸君らも知つての通り今、オレ達のファミリーは未曾有の危機に瀕している」

誰も音を立てない。言葉はまるで静かな水面を揺らす振動の様に浸透していく。

「それは、ひとえに過ぎ足る力を手にし、調子に乗ったマフィニアビモノセイだつ！」

「今も「ひつじ」の間にオレ達の仲間は死んで^セつてゐるだつ！」

「死なない保証なんてないし、勝てる保証も無い。だがオレ達は負

ける訳にはいかないつ！もう既に死んでいった仲間達に報いる方法はただ一つ、奴らとの抗争に勝つことだつ！」

「徹底抗戦だ！最後の一兵まで残らず殲滅だつ！オレに着いて来い！」

話終わり、響いていた声が静まり返る。まるでシーンと擬音が出そうな位静まり返る。一瞬、置いて爆発した。いや爆発などしてないが、まるでそういう聞こえる位の爆音だった。その様子を一瞥すると、背を翻し去つていく。書斎でもつと対策を検討しよう。

第十一話 最後……（前書き）

第十一話です。タイトルがあれですが別に終わる訳じゃないです。第一章完結つて所です。やつとマフィア篇が完結しました。これら原作までの空白期間になります。多分一気にキンクリします。主人公が大変になりますがちゃんと話は続きますので安心して下さい。

面白いと感じたら感想宜しくお願いします。評価も待ってます。後にこんな駄作を読んで下さった方に感謝を。

第十一話 最後……

あの演説から4日経つ。部下達は必死に戦線を維持してくれた。だが時間が経ち都合が良いのはオレ達ではなく奴らだ。初めは互角で数も余り差がなかつた。しかし、奴らのどこにそんな人員がいるのか不思議に思う位、後から後から沸いてくる。数の力は偉大だ。それだけで武器になる。戦力差のせいで次第に此方側の陣営が少しづつ崩れだした。今まで保つて来た戦線だが一角が崩れ出ると、もたないと判断したオレは直ぐに今の戦線を縮小。守る範囲を狭くする事で何とか戦線を維持する事が出来た。……が、それもあと少し持つかどうかである。そこで決心した。このまま戦つても負ける。だがまだ相手のボスを叩けば希望が見える。下つぱは、別に目的があつて戦つてはいる訳ではない。大半が命令されたからであつて出来れば戦いたく無いが、勝ち戦を捨てるのも馬鹿らしい話だから戦つてはいるんだろう。命令するものがいなくなれば今よりは有利に戦況を進めれるだろう。そして頃合いを見て、会談し落とし処を見つけて和解が妥当だと思う。異民化問題は頑張るしか無いが、今は生き残ることが優先だ。……長生きするためなら逃げれば良かつたのにな……自分でも知らない間に愛着でもわいたかな？

相手のアジトに特攻をかけることになった。嫌、そんなことしたく

無いんだけどね。生き残るためにこれしか無いんだよ。部下に任しても良かつたが、自ら行かなきや駄目な事に気付いた。部下達が信用出来ない訳じやない。どうせここに居たって死ぬのは変わらないならば、自分で道を切り開かなければならぬ。良いぜ、死にたく無い奴の底力魅せてやるぜ！

血と硝煙の渦巻く世界にオレは居た。どれがどっちの死体か何て分からぬ。それどころか人間だったのかさえも分からぬ。こんな状況でも眉一つ微動だにしなくなつた自分が怖くなる。敵と遭遇する度に少しの仲間を切り捨て足止めし、先に行く。仲間を切り捨てるのは辛いし嫌だが割り切るしかない。この特攻に付き合つてくれた馬鹿共は50人。こんなに居てくれたと思うとボスとしては誇らしい。命懸けの作戦で、まず死ぬであろう作戦に従つてくれたこの事実が嬉しかつた。確実に数を減らすなか確実に進んで行つた。幸い総力戦の様に見せかけて必死に戦つている前線の陽動が効いているのか、敵は意外と少ないが確実に数は減つて来ている。既に12、3名だ。仲間が一桁に入つた矢先にアジトに着いた。裏口から潜入する。驚くほど敵が居ないさつきまでより圧倒的に少ない。前線に出払つていると考へるが何か違和感を感じる。アジトに入つてからこれといった戦闘も無く調べたボスの部屋に一直線に向かう。ボスの部屋の扉の前に立つ。扉を蹴り飛ばしそのまま扉を盾にするように部屋に飛び込む、部下達も次々に部屋に入る。そして絶望した。

ボスはいた。継承式に見た顔だから間違いないだろう。だが問題はここからだろう。その部屋はかなり広かつた会議でも開ける位にしてそのボスを守るように立つ数十人の男達。だがこの男達は明らかに人から逸脱した異形だった。すなわち全員異民だった。体が硬直するまるで凍つた空気が体まで凍らしたようだった。それを溶かしたのは相手のボスだった。

「まあ、まずはは良くてここまで辿り着いたと褒めておこう」

「残念だつたな私のファミリーには嗅覚が異常に進化したタイプの異民化をした奴がいてね。君達がこのまま終わる筈が無いと考えた私は監視していた。そしたら案の定特攻してきた。もう一度言う。残念だつたなお前達の動きはお見通しだ」

「ヤニヤと嘲笑を向けて来る。非常に生理的嫌悪がしたがどうしようも無い。万事休す。

「この世とお別れは済んだか?.....殺れ」

無慈悲に宣告された。奴らがオレ達に向けて銃を撃つ。部下は全員オレの壁となつて死んだようだ。かく言う自分も右肩と腹に一発ずつ食らつて虫の息だ。相手のマフィアのボスが近寄つてくる。そしてオレの髪を掴み上げ自分に顔を向けさせる。

「どうだ?自分の無様な姿は?お前は私達の歴史に刻んでやるよ。昔、私に逆らつた馬鹿としてな。クッククッハッハッハ」

その言葉に諦めそうだった自分の心に火が点いた。近寄つて来た馬鹿をあらんかぎりの力で胸ぐらを握りしめる。

「だつたらオレからアドバイスだ。熊は断末魔が止むまで近寄つてはいけないって聞かなかつたか馬鹿め」

そう言つてせつときまで忘れていた物を取り出しだんを抜く。そう手榴弾だ。

「一緒に地獄へ行こ」つば?

「や、止める。こんなところで あつ」

光が部屋を支配した。

第十二話 ゼロ領域（前書き）

第十二話です。ちょっと短くてすいません。自分が一番書きたかった所が書けました。あと一話入つて原作に突入します。レジエンドの方の展開は原作に沿うので主人公の出番が減るかも知れません。でも主人公の視点で原作を語るので居ない訳では無いです。

早くドミニオさん書きたいです。自分の表現力でドミニオさんの死に様を上手く表現出来るか心配ですねえ。

面白いと感じたら感想を宜しくお願いします。あと評価も待つてます。最後にこんな駄目小説を読んで下さった方に感謝を。

第十二話 ゼロ領域

意識が覚醒する。何年も経つたような気がするし、まだ一分も経つて無いかもしない。朦朧とする意識の中思い出す。あれ……オレ死んだ筈じゃ……。ハツとして体を起こす。嫌、この表現は正しく無い。何故なら自分は横になつていなかつたからである。普通、体を起こすというのは地面に寝転がつた状態から起き上がるなどを言うが、自分は寝転がつていなかつた。何せ寝転がるための地面が無いからである。そりやもう驚きだ。落ちないように手足をジタバタさせたが少しして全く落ちる気配が無いと分かつたら止めた。周りを見る。真っ暗だ。黒という色だけが支配している空間。それ以外は認めないと言う程頑なに他の色を混入させない。何でこんな所に……。自分は死んだ筈では無いか。もしやこれが死後の世界つて奴か?なら地獄何だろうな。なんせ黒しか存在しない空間に放り込まれるのはかなり辛い。人間一番耐え難いのは退屈なのだから。と、そこまで考えて自分が死ぬ直前のこと思い出す。そうだ……確かにあのとき……。手榴弾を投げて死を覚悟したとき、急にオレが倒れた場所に穴が空いた。真っ黒で混沌の混沌たる姿がむき出しになつて顯れる。もちろん逃げることなど出来ない。逃げる積もりも無いが……オレは逆らこと無く飲み込まれていく。朦朧とする意識の最後に視界に眩しい光の奔流が走つた。そうだ、そうなつたんだつた。つまりここは……絶縁空間。この場所を正しく認識したからなのか、それとも時間が経つたからなのか分からないが、急にそれはやつてきた。息が詰まる。大気が無くなつたのだ。空気以外の何かとしか形容できぬものが喉を伝う。どろりとしていながらにして水のように流れ、体内の指先にまで粘り気のある不快なものが付着する。刹那の内に細胞の隅々まで浸透し、身体中の中身を総入れ替えするような感覚。何とも言えない恐怖と苦痛が来る。視界が捻じ曲がる。

聴覚が断絶する。

嗅覚が逆転する。

触覚が奔流する。

味覚が散逸する。

全ての感覚が狂う。自分以外の何かに生まれ変わろうとするかのように底辺にして絶頂、奇怪にして滑稽な変革が自分の身体の中で起こっているような感覚。

まるで

世界が

溶けて

崩れた

よつな。

第十四話 ゼロ領域2（前書き）

第十四話です。主人公、正真の異民となりました。でも最強にする気はこれっぽつともございません。能力何かは次回。あと少し改行してみました。すいません余り変わりませんでしたね。

どうしても理屈が思い付かず、少しだけご都合になりました。すいません勘弁して下さい。こじつけ臭い理由ならあるには在りますが。

貴方はもし自分が絶縁空間に入つたら生き残れると思いますか？作者は一分もしない内に死にそうです。

面白いと感じたら感想宜しくお願ひします。評価も待つてます。最後にこんな駄目小説を読んで下さった方に感謝を。

身体中がめちゃくちゃだ。酸素を無意識に欲しがる。亞空間増設機が想いを受け取ったのか、大気に酸素が満たされいく。肺中に酸素が行き渡るも、急に取り入れたからなのかむせてしまつ。

「ゴホッゴホッ」

咳も落ち着いてくる。だが咳が収まるつて少しすると何だか凄く眠くなる。まるでもう一度と起きないかのようならかで心地よい感じだ。何だかもう全てがどうでも良くなつていく。

こう空氣中に分解されて何かに生まれ変わるような、それでいて不快な感覚。オレはこの感覚を知つていて。

そう死だ。あの全ての抵抗を嘲笑うかのような無力感、まるで、生のタイムリミットを示したかのようなカウントダウンに感じられたあの次第に聞こえなくなつていく心臓の鼓動。そして何よりも全てが凍り付いたかのように冷たくなつていく体。ぞつとする程嫌だった。

もともと長生きしてやると決めたのもあの恐怖心を一度と味わいたく無かつたからだ。人間誰だって死にたく無い。

彼がひとえにこの絶縁空間で自我を保つていられるのも、一度死への恐怖心を味わい一度と味わいたく無いと心から願つてゐるからだ。いや、願うというレベルではない。既にそれは一度死んだことで手に入れた生への渴望だ。

普通の人では生き残るどころか自我すら保つていられないこの絶縁空間。

皮肉なことに死んだことが死なない理由だった。

何年経つただろうか……。原作の主人公が言つたことが良く分かつた。

「自分の人生最高の瞬間が、まさしく言葉通りだった」

とあるが、確かに最高だつた。だが最高の瞬間が永遠に続くならそれが普通になる。流石に変わらない景色をずっと眺めるのは辛いし、何年も前から飽きて居た。

それにあんまり気にしている暇も無かつた。自我を保つ為に必死に死にたく無いと頭の中でリフレインさせていたからだ。何か情けない気がするが、プライドは一の次だ。

更に時間が流れた。死にたく無い一心で頑張つて來たが流石に一般人にはもう無理だ。死にたく無いという想いも、もうすでに摩耗し

て来ている。

色々死亡「フラグ」があつたのにな……。予想外なところの死亡「フラグ」を回収してまつたぜ。あーあ、イグナシスとかガメルダ市とかあつたのに。

そう言えば自分のファミリーはどうなつたのだろうか？生き残つてくれているだろうか？かなりの時間が経つたが、そろそろガメルダ市にテイルティスファミリーは出来たのだろうか？何かすつごく気になつて来た。元同業者として気になつてくる。原作は、始まつたのだろうか？色々気になつて來たがもうオレは駄目だ。摩耗しきつている。

しかし、一度目の人生はこんな所で終わりか……一般人にしては頑張つたかな？残念なのは原作とやらに関わつてみたかつたかな？な？急に周りが明るくなつた気がした。自分に迎えでも來たのだろうか？自分の行き先は天国でも地獄でも無く自我の無い魂として永遠にさ迷うと言つのに……。

第十五話 ガメルダ市（前書き）

第十五話です。長く待たせてしまいすいません。土日は忙しかったんです。……言い訳は此処までにして、と。

今回から原作に行こうとしたら、まだ原作前になってしましました。すいません。でも原作キャラが出ました。ちみつこいですが。

作者の力不足で原作キャラに可笑しな所があるかも知れません。キャラ崩壊が嫌だつて言う方はブラウザバックをお願いします。あと変なところが有れば教えて下さると有難いです。

面白いと感じたら感想を宜しくお願いします。評価も待ってます。
最後にこんな駄目小説を読んで下さつて方に感謝を。

第十五話 ガメルダ市

目を開けてまず感じたのは強烈な光だった。目が焼けるかと錯覚する位の光源だつた。そしてのたうち回る。

……まで光？

可笑しい自分は魂だけの存在になつた筈だ。ましてや絶縁空間で光何てある筈が……。

ゆっくり目を薄めて開き回りを見る。暫くは何も見えず白いだけだつたがうつすらと見える様になつて來た。

……どうやら部屋のようだつた。オレは生きている。これで一回死に損なつた。悪運が強いのか、死神に嫌われているのか至急、脳内会議したい。

まあ冗談は置いといて。どこ何だらう此処？立派な部屋で調度品も一級品、元マフィアのボスのオレが見ても、申し分ない位素晴らしい。多分この家の人が拾つてくれたのだろうと予測する。それならばお礼を言わなければならぬ。そう思つて

「痛つたーー！」

ベッドから転げ落ちた。盛大な音を発てる。

「何だ？ 体が動かねえ」

取り敢えずベッドに戻ろうとするが体がまるで石になつた様に重い。そういえば、絶縁空間に引きこもつてたから、結構動いてないな。やつと戻れたのにリハビリからかよ……。

あのあと盛大に音を出したからか、厳つい黒服を連れたちつちやいお嬢さんが現れた。まじびびつた。リアルでびびつた。胸元に奇妙な膨らみを全員から発見……」レーマフィアの家がああああアアああア！

発狂仕掛けたがもう大丈夫だ。ノープロブレム。落ち着いたころを見計らつて黒服の特に筋肉の素晴らしい方に首根っこ掴まれてベッドに寝かされた。そしたらお嬢さんに声を掛けられた。

「あんた、家の庭に倒れてた所を見るに何か訳有りなんでしょう？」

庭に倒れてた？まさか絶縁空間からこの庭に落ちたのか？そんな風に困惑しているオレを他所に勝手に話を進めるひつちやいの。

「あんた、これから行く当てがあるの？」

取り敢えずは無いと言つて置くのが正しいか？

「無い」

「そう、なら丁度良かつた！あんた私の家来になりなさいーーはい、決定！嫌だつて言つても、もう駄目だよ！」

..... what? ナーをイイダスンダこのお嬢さん。
やけにハイテンションだ。だが行く当で、が無いのも事実。取り敢え
ずの食い扶持を探さなければならない。渡りに船、そう思った。そ
ういえば此処なんてファミリーだらう？

「そういえば、此処つて何処なんでしょう。あと貴方は？」

「此処？知らないで来たの？変な奴」

「一度しか言わないからね。此処はガメルダ市のティルティスファ
ミリーで私は娘のリリスよ！」

..... でつかい死亡フラグが戻つて来ました。
挙呂、神様呪つてもこれは許されませんでしようか？..... 何？許さ
れないつて、そんなバカな。

第十六話 いい加減マフィアじゃなくても良いんじゃない？（前書き）

第十六話です。主人公がどちら側に付くか決まりました。イグナシス側です……が、リリスが付いているから付こうかなという感じです。基本スタンスはリリス優先です。因みに恋愛は無い予定です。あくまで予定です。昔の自分と似たような立場に同情して、孫を見守っている感じです。

面白いと感じたら感想を宜しくお願ひします。評価も待っています。
最後にこんな駄目小説を読んで下さった方に感謝を。

第十六話 いい加減マフィアじゃなくても良いんじゃない?

あの後、雇用条件などの確認をしたり、自己紹介をした。どう見ても怪しそ満点のオレを何故雇つたのか聞いたら……

「あんた身寄りなさそうじゃない。なら、使え無くても捨てれば良いし、使えるなら儲けものだもの」

何て言いやがりました。原作でも思つたが、もうこんな小さい頃からこんな性格なのね。確りしてんな。でも、甘いね。体が動かしづらかつたが、何故か今はもう最高のコンディションだ。
三人か……。

近くにいた黒服の一人の懷に素早く潜り込む。今までとは段違いのスピードだつた。周りは何も気付いてない。やつと潜り込まれた黒服がオレに気付く。だが遅いオレはもう膝を腹部にめり込みます寸前だ。回避行動を取ろうとするが敵わざめり込む。やつと周りが気付くが、既にオレは膝をめり込まし奴から拳銃を奪いとる。
そこまでして、黒服の一人が銃を放つが肩を掠めるだけで終わる。
そして、リリスの方に向かい頭に銃口を突き付ける。

「動くな!」いつの頭を吹き飛ばしたく無いならな

リリスは展開に着いてこれで無いのかキヨロキヨロ田線をさ迷わせる。そして、理解したのか下を向いて頃垂れるも、直ぐにキッとした目で此方を見てくる。

「そう言つ利己的な考えは、嫌いじゃないが……もつ少し考えた方が良い。もしオレが敵対マフィアに雇われていた者だつたらどうする気だ?」

「そう言つことを言う人は、敵じゃないわ」

「…………そう言つことを言つてているんじゃないんだが……まあもし相手が自分の力が敵わない奴だといつ可能性も考えるべきだつてことだ。あなたの判断ミスで割りを食らうのは部下だからな」

そこまで言つて銃口を頭から離す。そして拳銃を黒服に返す。

「おい、アンタほらよ。拳銃は確り握つてる」

床を滑らせて返す。次の瞬間、残りの一人から発砲される。腕の筋肉が強張つていたことから予想していたオレは難なく銃口の先から逃れる。そして、膠着状態に陥り掛けたとき、

「ストップ！止めなさい。……ねえあんた試したわね？この私を？」

「そうだが」

「雇われる気はあるの？」

わずかに考えるが、返事をする。

「もううん」

「なら、良いわ。あんたかなり使えそうだしね。私が判断ミスしなきゃ良いんでしょ？」

端から見ても自信に満ちている。流石に目を見開く。命を狙われといて直ぐこの対応。……これが一つの世界で中心になり得るカリス

「マか……オレじゃ敵わないな。オレもこれくらいカリスマがあつたらなあ。ファミリーを勝たせてやれたかも知れないのに……。」

そうだ、なり今度はそんなことが無い様にしよう。この自信に満ちた瞳をずっと守ろう。それがあいつらの最後の手向けだ。

そう言えば、リリスに銃口を向けたときにも、叫んだあのセリフ……完全にやられ役のセリフだ。フラグが建たなくて良かつた。

第十七話 正直の異民（前書き）

第十七話です。

此処で皆さんに重大なお知らせです。

先に謝つておきます。すいませんでした。前に投稿した内容ですが、原作上重大な矛盾が有りました。判る方には判りますが、それはリスはこの国の生まれではなく、元々違う国の人でゼロ領域に落ちて絶縁空間を越えてガメルダ市に来たのです。マフィアの娘という立場もガメルダ市侵食の際に奪いとつたものです。

ですので、この小説ではリリスは普通にこのガメルダ市の生まれで小さい頃にゼロ領域に落ちて戻つて来たという設定にします。

良く原作を確認しなかつた作者のミスです。すいませんでした。

面白いと感じたら感想を宜しくお願ひします。評価も待つてます。
最後にこんな駄目小説を読んで下さった方に感謝を。

第十七話 正真の異民

あの後、和解したオレ達は仕事の話をしたが、どうやら緊急時や他勢力に仕掛けるとき以外は、基本的にリリスの護衛をしていれば良いらしい。

あと、妹のニリスにも会った…………ん？待て待て、何故ニリスが居る。ニリスはリリスがゼロ領域を生き延びた時に作った鏡像だろ？何で居るんだ？

……まさかもう既に正真の異民ですか、ゼロ領域越えちゃいましたか？ということはイグナシスとも会ってる訳で……まあしそうがない。オレは、あの時に感じた自信に満ちた目を守れれば良いさ。とにかく自信満々なのは良いが、それで足元すくわれてちゃ意味がない。

オレ達にはでつかい死亡フラグが建っているんだ。何とかしないとなあ。取り敢えずイグナシスをどうしようか……。

一番良い選択はオレもリリス達も生き残る事だが……実際問題無理だ。この国はイグナシスの実験で破棄されてゼロ領域に叩き込まれる。例えイグナシスと関わって居なかつたとしてもそこで終りだ。いや、リリスなら生き残るかも知れないが……オレは無理かも知れない。あんな所に二度と入りたくない。

ある意味、イグナシスに協力しているのは良い選択かもしれないが、最大の難点は自分達が、所謂世間一般では悪役的位置にいる事だろう。一級フラグ建築士の自分ならそれだけで死亡フラグを建てれそうだ……あれ目から汗が。

主人公側にならと考えたが、こつちはこつちで、此処はオレが食い止める的な事が発生しそうで怖い。何だらつ……急にトイレに駆け込みたくなつた。

自分の力位、分かつてゐる。自分一人がイグナシス側に回つたつて何

も変わらない方が可能性が高い。

一番はイグナシス側の勝利だが、ニルフィリアが居るせいでそれも怪しい。ニルフィリアより言いたくないが劣るリリスは捨てられてしまうかも知れない。

ならば、ベストよりベターだ。原作の様に話を持つて行く。それならば、取り敢えず死にはしない。アイレインの中で生き残る。アイレインに月から出た後に出してもらつて、そして最終決戦で一人とも生き残れば良い。

これなら生き残れる可能性が高い。問題は何年掛かるねん！…という話だが……一応自分は正直の異民、寿命など在つて無いに等しい。流れる時間に耐えかねて、発狂しなきや大丈夫さ。ゼロ領域とは違ひ退屈はしないだろうからな。

良し！方針は決まった。第一計画はこれにしよう。

問題はリリスに言つかどうかだが……無理だな性格上負けると言われて、ハイそうですかと言える性格ならば、そもそも絶縁空間を生き残れ無い……ならば自分一人でやるか。

オレは自分に無かつたものを持っているあの少女さえ守れればそれでいい。ずいぶんと独りよがりな作戦で余計なお世話かもしけない。というか余計なお世話だろう。分かつてくれとは言わないが、オレが憧れたその瞳の輝きだけは失つて欲しくない。

一級フラグ解体士のオレが片つ端からフラグをクラッシュしてやるぜ！

第1-8話 レギオス世界の成り立ちの理由（前書き）

お久しぶりです。忘却の彼方です。長い間ほつたらかしにして下さいません。テストが終わつた後に模試があつて忙しかつたのです。まあ言い訳は、このぐらいにして置きまして。もう一度、本当にすいません。

今回の話しから専門的な言葉を使います。どうしても使わなければいけなくて…大体 Wikipedia を見ていただければ理解頂けると思いますが、たかだか小説を読むのにそこまでして頂くのもあれなんで、この場を借りて少し説明したいと思います。ネタばれも結構あるので気をつけてください。あと、あくまで独自解釈です。設定集もみてますか…。

絶縁空間 ゼロ領域が亞空間同士の間に発生し、互いの行き来を妨げる壁となつたもの。

正真の異民 これは絶縁空間で確固たる自我を保ち亞空間へと帰還することができた者のことで、絶縁空間で生き延びるための願いや思いを元にした自分だけの法則を得る。人間というよりかは、一つの法則をもつた一つの人間の形をした異世界だと思ったほうが良い。

取りあえずこのぐらいで、他にも分からぬことがあれば遠慮なく
感想に書いてください。

面白いと感じたら感想を宜しくお願ひします。評価も待っています。
最後にこんな駄目小説を読んで下さった方に感謝を。

第18話 レギオス世界の成り立ちの理由

前回は重大な決意をしたが、まだまだリリスは小さい。つまり原作開始までの時間まで対策を練れるということだ。非常に大きなアドバンテージだ。

大事なのは、どうしたら一人生き残れるかだ。前回少し考えたがもつと詳しく検討しよう。

レギオスの世界 자체かなりの奇跡で成り立つている。何故ならあの世界はエルミ・リグザリオ失くしては出来得ないからだ。だがそれ以上に最も重要なことはエルミの夫ドミニオが死んだことだ。彼が死んだことによってエルミはイグナシスに復讐する気になり、ゼロ領域にイグナシスを叩き込んだのだから。イグナシスは違う亜空間の世界に行こうとしていたが、そのためには今いる亜空間に存在する全ての亜空間を壊さなければならない。亜空間同士の間には絶縁空間が在りそれが在る間は異なる規格の亜空間同士の行き来が出来ないからだ。そこを逆手に取りエルミは新しく亜空間……つまりレギオス世界を創ることによって、イグナシスを絶縁空間に閉じ込めることに成功したということだ。ならばもし、彼が生きていたのならエルミは復讐など思いつきすらもせず、そしてレギオス世界を創らずに何処かに消えただろうドミニオと。つまり彼には悪いが、レギオス世界が創られるためには、死んでもらわなければならないということだ。物語上イグナシスが殺したが、いくら原作とはいえ大まかな流れは変わらないが全くの変更がないわけでもあるまい。イレギュラーが居ることだしな。最悪この手で……まあ最終手段だ。そんな綱渡りはしたくない。もしオレが殺つたとバレればオレがゼロ領域で彷徨わされかねん。殺るなら慎重にかつイグナシスに罪を被せなければならぬ。…………何かまたフラグが建つたような気がしたが、まあこの話は置いておこう。

次に生き残るために重要なのは戦力だ。いくらこうして策を練つたつてそれを実行出来なかつたりしたら意味がない。取らぬ狸の皮算用だ。だがこれについては当てが有る。曲がりなりにも絶縁空間を生き延びたオレは正直の異民だ。何か異世界法則があるだろうとあたりをつけたのだが…全く無い…いや身体能力の向上だけしか確認出来ていらない。原作では自分の願つたことのような法則になるらしいが、自分はただ死にたくないとただそれ一点のみ思つていたオレの能力はなんだというのだろう?まさか不死身だとでもいうのか?だが試す氣にもならないし、あまりにも馬鹿馬鹿しい考へだ。ただ強く願つただけで叶う場所だととしても全く曲解もせずに亜空間増設機が受け取つたか怪しい。だが、おそらくそのようなことに準ずる異世界法則だと思う。不死身とはいからずともかなり死ににくいとあたりをつける。そこまで考えて疑問に思つ。あれ?微妙…。アイレンは身体能力向上はデフォで右目に本当の異世界法則が在る…これが主人公補正つて奴なのだな。…主人公なんか大つ嫌いだあああああアアアアアアアアアツ…!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5070t/>

レジェンド・オブ・一般ピーポー

2011年8月5日23時30分発行